地下道からの午后

奥野忠昭

地下鉄の改札を出た。電車から吐き出された人は多い。俺は左右を見回し、地下道を出口の方向へと歩き始めた。上がり口は、はるか彼方にある。

突然、肩の辺りに強い衝撃を受けた。身体が傾く。視線がコンクリートの床を這う。かろうじて倒れるのを防いだ。身体を立て直し、前を向くと、人々の群れが俺をどんどん追い抜いていく。ゆっくり歩くやつなんか誰もいない。もしいたとしたら、それはただの障碍物でしかない。

誰だ。肩に強く当たりながら、謝りもせず、俺を追い抜いて行ったやつは？

あの踵の尖った黒いハイヒールの女か、それとも、足の短い中年男か。彼らの横をすり抜けていく、あのモヒカン刈りの若者か。

みんな急いで、誰よりも速く歩こうとしている。遅れたらたいへんなことになる。津波がもうすぐ地下道にも押し寄せてくる、とでもいったふうだ。俺の前が少し空くと、そこへ誰かが割り込んでくる。

俺は午后からの仕事へと向かう途中だ。俺だって急いでいるのだが、俺を追い抜いていくやつが多い。歩くのさえ俺は負けている。みんな、どうしてもう少しゆっくりと歩かないのか。

この頃、なんだか気分がいらついてしかたがない。少し身体を当てられたぐらいで耐えがたい腹立ちを覚える。以前ならこんなことはなかった。今はナイフがあれば肩にあたったやつを追いかけて行って突き刺してやりたい。

午前中、納税滞納者に催促の電話を掛けつづけて疲れたせいか、それとも昼食時のあいつとのやりとりのせいか。

役所の地下にある生協の食堂でチキンカレーを食べているときだ、同期採用の竹井が「今日はまた、めずらしいやないか、役所にいるなんて」とにこやかな表情をして近づいてきた。嫌なやつに会った。彼とはあまり話したくない。総務部長と親戚だし、昔からこの町に根を下ろしている旧家の出だということで、街の有力者との人脈があり、議員たちも、彼には一目置いている。

「総務課なんて、周りに気を遣うことが多くてね、やってられんよ。その点、君たち徴収係は外回りが主だから、自由がきくし、うらやましいよ」

俺はそれを聞いたとき、今先ほどの腹立たしさとはまた違う、それより何倍も強い腹立ちを覚えた。彼は俺たちの苦労をわかっているくせに、と心の内で呟いた。でも俺は我慢して作り笑いをした。俺は先日から心を入れ替えたのだ。

「課長に昇進したんだって、おめでとう。同期で出世頭だから、どうか、俺たちのことを

気にかけてくれよな。でも、課長はたいへんだろう」

これは今までの俺なら決して言わなかった台詞だ。いや、言ったかもしれない。しかしその後で、口が苦くてつばを何度も飲み込んだに違いない。今日は違う。酸っぱい唾液が出てこない。凄いものだ。考えを変えるだけで身体も反応し始めるなんて。

彼は課長に昇進したことを誇るために俺の前に現れたのだ。大いに褒めてやれ。ただ、そう思う自分がどこかで彼を羨む気持ちもある。俺はまだ主任だ。財務部、税務課、特別税等滞納金徴収係、主任である。俺たちの上には、係長（主査）、課長補佐（主幹補）、課長（主幹）、副部長（主務補）、部長（主務）と五階級上がある。しかも、我々の係の全員が主任（熟練者という意味）である。竹井との給料差はかなりあるだろう。年に百万はくだらない。それに、職員の意識改革、行政のスリム化、財源の確保を主張して当選してきた若い市長は、税の公平化と財源の増額を旗印に、滞納者の削減を目指すことを税務課職員に求めてきた。しかもそれを実現するために特別税等滞納金徴収係を新設し、地方自治体に納めなければならない住民税、固定資産税、国保、介護保険料等の滞納者には納付を要請し、応じない者には、差し押さえを躊躇しないように命じてきた。督促状の送付など事務的な仕事は派遣社員に任し、正規職員は滞納者に直接出向いて、一年以上滞納している者には納税するように説得するのだ。それに、職員が説得に回る地域を、滞納額をほぼ同一にして決め、いかに多く取り立てるかを競争させる仕組みを取り入れたのである。市長の前歴は大手の消費者金融の部長職にあったということで、そこで行われていたことを持ち込んできたのだ。

二年以内の滞納者を一括で納めさせたら二点、分割なら一点、三年以上の滞納者に一括納めさせたら三点、分割なら一点。それに差し押さえに持ち込んだら二点などと働きを点数化し、職員に競争させる方法である。

低い点数の者は別室に呼び出され、指導というかたちの恫喝を受ける。みんなの前ならどのようなことを言ったかがわかるので、密室に呼び出すのだ。

それに、点数の多いものには夏・冬のボーナスを多額にし、成績によってランクを一つ上げる特別昇給制度（特昇）を利用して給料を上げ、さらには役職の推薦もその成績を大いに参考にするという。この間の夏のトップをしめた三年下の西川という男が係長補佐に任命された。仕事は我々と同じだが、次期係長候補の一人になったということである。これは我々の係のみある役職で、人事課が臨時に設定したもので、いかに滞納者を少なくしようとしているかが窺えるものである。それになった西川は竹井に指導をあおぎに行っていたという。竹井もかつて税務課にいたそうで、滞納者の取り立ては群を抜いていたという。禁止されている職場まで催促に行ったらしい。しかし、決して職場内へは入らないで、昼食時を狙って、電話で呼び出したり、彼の社の受付係に「友人でちょっと会いたいから、昼食時に外へ出てくるように言っておいてくれないか」と言って外へ呼び出すそうだ。そのとき首からぶらさげいる「〇〇市税務課職員証」を決してはずさなかったという。差し押さえ額も半端じゃなかったという。西川も竹井に教えられてそのようなことをやっているのかもしれない。

突然、竹井は俺から去り、大声を上げた。見ると食事を終わった部長らしい男に挨拶をしている。

しばらく男と話し、彼を見送った後、竹井はまた俺の前へ来た。

「君なあ、そろそろ本腰を入れなきゃならん歳だからな、四十も半ばを過ぎたのだろう。それに、君は同期会の幹事だ。頑張ってもらわなけりゃ。うははは」
竹井は笑う。その声の中に俺を見下げる匂いがする。ひょっとして誰かが先月の俺の成績を伝えたのかも知れない。俺は先月、初めて最下位になった。それで、吉田係長から密室に呼び出された。
「どうしたのかね。君が担当すれば、いつも免除者が多数出る。市の一番の貧困地区になる。最も富裕層の多いC地区でさえ、免除者が二番目に多い貧困地区になった。おかしいではないか」
「はあ、しかし、どう考えても納税が無理な家庭があるもので」
「君は確か、この係に来る前は福祉課におったのだろう。その課の考えがまだ抜けきっていないのと違うか。この課に来た以上、徴収官の考えになってもらわねば困るよ。もうここに来て五年は経つ。それなのに、差し押さえ件数が一番少ない。それに反し免除者が一番多い。これじゃ困るよ。ひょっとして、体調でも悪いのと違うか？　それとも家庭に問題でも生じたのかね。傍から見ていても元気がないよ」
「はい。申しわけありません。家庭にも体調にも何ら問題はありません」
「そうか、それだったらいいが」
しかし、確かに気力が衰えていることは事実だ。気分がよくない。イラつきが激しくなった。
「君のところの納税額はかなりある。だが、それを免除者が帳消しにしている。最下位がつづくと、ことだからね。本気で頑張ってくれないと。西川君など、ここ三ヶ月、免除者を一人も出していない。どうしてだろうね。君、よく考えた方がいいよ。公務員は免職がないから安心しているのじゃないだろうね。辞めさせようと思えばいくらでも手があるんだから。昔なら、ここで大声を出して君を怒鳴りつけたところだが、今はそんなことをしない。週刊誌にでも告白されたらことだからな。まあ、このままじゃやばいと思ってくれ」
それを思い出すと暑くもないのに額から汗が出る。いやなことを思い出した。しかも竹井の前で。だが、俺は彼に手を差し出して握手を求めた。
「そうなんだよ、俺も五十歳に近づいてきた。そろそろ主任を卒業しなければな。人事課を仕切る総務部長は君のおじさんだろう。よく言っておいてくれよ」
「うん、うん、わかった。食事のところ、邪魔したな」
竹井は再びわははと笑って、俺から去った。その笑いは、議員たちがここにきて職員を捕まえ「この間はご苦労だった。ありがとう」とか言った後でよくする笑いだ。
そういえば、ここしばらく俺は笑ったことがない。笑う人は長生きするということだが、これでは俺は早死にするな。だが、あんな笑いは、長生きには繋がらない。あいつはひょっとして議員にでも立候補するつもりかも知れない。それで、練習のためにあの笑いか。いや、その前に人事課長になるのも時間の問題だろう。
俺はあいつの前に行って、申し訳ありません、申し訳ありません、と頭を何度も下げている姿を想像する。どんなミスを犯したのか？
「もう少しやれる男だと思っていたよ。もういい、他のやつにやってもらうから」あいつはかすかな笑みを浮かべて、そう俺に言い渡す。
どうしたことだ。今日はいやなことばかりを想像するなあ。引き寄せの法則というのが

あって、悪いことを想像していると悪いことが引き寄せられてやってくるという。こんなことでは、今日の取り立てがうまくいかない。もっと強気になれ。
地下道の脇にある地上へ向かうエスカレーターが見えてきた。やれやれと思った。ふっと上がり口を見た。あれ？　おれは立ち止まった。
出口の番号が違う。そんなはずはない。もう一度確かめる。やはり違う。ひょっとして反対方向へ歩いてきたのか？　こちらの番号は北出口一番。俺の上がるのは確か南出口一番。
俺は肩から掛けている鞄の中から地図のコピーを出し、立ちながら行く先の地図を確かめた。間違いない。出口は南出口一番だ
俺は何度もこの地下道は通っている。だから南と北は間違うはずがないのに。今日は頭が狂っているのか。これも竹井とのやりとりのせいか。
俺は焦る。向きを変え、急いで南出口に向かう。南に向かう人たちも多い。俺は、彼らよりも早足で歩く。あっ、誰かの肩に当たった。だが、俺は振り返らない。謝りもしない。そのような時間はない。約束の時間に遅れれば、それが払わない口実に使われる。約束の時間には絶対遅れてはならない。俺はいっそう早足で歩く。

俺は先ほど訪れた家からすでに十分程歩いた。戦後間のないころに建てられた家々が立ち並ぶ、タイムスリップしたような地区に入った。
先ほどの家には急いだせいで約束の時刻より十分ほど早く着いた。しかし、どうだ。玄関のドアに張り紙がしてあって、市の職員様、緊急の用事ができましたので、そちらに行きます。例のものは至急に払い込みます、とあった。
なんということだ。必死に急いできたのに、と俺はしばらく、玄関を出て立ち止まった。次の家に行く気がしない。それで、すぐ傍の電柱の元に行き、それにもたれながら空を眺めた。綿菓子に墨をぶっかけたような雲が空からつり下がっている。
こんなことで気落ちしていてどうする。何としても上位になると思ったのではないのか、心を入れ替えると思ったのではないのか。俺は自分にハッパを掛けた。すると少し元気を取り戻せた。ようし、次の家では、絶対に税を納めさせてやる。俺は電柱を背中で蹴って歩き出した。
これからいく家は、以前一度だけ行ったことがある。だから道に迷うことはない。
目的の二階建ての文化住宅に着いた。外付けの鉄の階段を、音を立てながら登る。手すりは錆びていて、触れたら錆が剥がれ飛び散るに違いない。それになんだかアパート全体が少し傾いているようだ。これが文化か。いかにも皮肉っぽい名前だ。ただ、これを文化住宅と言うのはこの辺りだけらしい。東京では何と呼んでいるのだろう。テレビでは集合住宅と呼んでいるように思う。
細い路地を挟んで向かい側にも同じような文化住宅が建っていて、白髪で背が縮んだ老女が手すりを持ちながら登っていく。
二階の片方が柵になっているコンクリートの廊下を歩き、真ん中辺りに当たる部屋の扉の前に立った。
「こんにちは。市の税務課から来ました」大声を出す。辺りの住民に聞こえるだろう。だ

が、この方法はこの地区では効果がない。かえって同情を誘うのがオチだ。
扉が半分開かれた。
「おお、またお前か。何しに来た」髪の毛がバサバサで、今起きたところといった女が男言葉で応じてくる。
彼女はまだ五十歳を越えてはいない。だのに五十をはるかに越えた顔つきをしている。額や頬にかなりの深い皺がある。背は普通だが痩せているせいか小さく見える。
「市民税と介護保険料がここ二年ばかり払われていないので。このまま放っておかれましたら法的に処分されることになりますから。早急に税金を支払って頂こうと思いまして」
「何、寝ぼけたこと言うとんねん。税金、払え、払えって、この税金泥棒」
黒っぽい肌に囲まれた大きな眼をむいて言う。ふっと魚の目を浮かべる。どちらが税金泥棒か。絶対払わすぞ。口中に苦みが走る。俺は前回来たときと違うぞ。人が変わったんだ、と自分に言い聞かす。減点3なんてやられてたまるか。
前回ここを訪れたとき、免除者にしてやってもいいかなと思ったのだ。そう思ったのは、彼女が息子のことを言ったからである。
「息子は大学へ行かしている。しかも東京の大学へ。アルバイトして、金は自分でなんとかすると言って出て行った。行きたい大学へ行かせるのは親の務めだろう。アルバイトだけではやっていけないことはわかっている。奨学金はもらっているが、いくらかは仕送りをしてやらないといけない。それに、夫は癌で三年前に死んだ。会社が潰れて、それ以後、派遣社員をしていたが、酒を飲み過ぎたのか、肝臓癌にやられた。入院費や治療費なぞ消費者金融で金を借りた。それも返さなければならないし、家賃も滞っている。吾(われ)はトイレ掃除のアルバイトと、夜、居酒屋で働かしてもらっている。金はないねん。それでも税金を払えと言うんか」
俺は、彼女が「息子を大学へやっている」と言ったところに心が動いたのだ。それも東京の。きっと頭のいい子なんだろう。
俺はしばらく黙った。言葉がみつからなかった。俺は高校の終わりに、母の姉のところへ借金を申し込みに行ったときのことを思い出す。
「伯母さん、お願いだから、お金貸してよ。俺、働けるようになったら絶対返すから。やっぱり大学へ行きたいねん」
俺は少年時代、町からかなり離れた山村に住んでいた。母は、父が亡くなったとき、母の姉を頼って故郷へ帰ってきたのだ。ここに来ればなんとかなると思ったらしい。父は俺が六歳のとき肝臓癌で死んだ。
村のほとんどが農家で、ビニールハウスで野菜を栽培していたり、梨やぶどうの果樹園が多く、田圃も多くあった。だが、町から遠く離れていて、山の中の盆地に開けた村で、町との交流が少なく、戦争が終わって相当経っているのに、考え方など、まだ昔のままだ。
母は自律神経失調症を患っていて、ずっと寝込んでいた。それにうつ状態だった、働こうにも働けない。それで、俺が土・日には家で村の小・中学生を集めて安い値段で学習塾を開いて金を稼いだ。朝は新聞配りをしてから一時間半近くかかる工業高校へ通った。
「お前、まだそんなこと言っているのか、高校へ行くときあれほど言っておいたではないか。あのとき、お前は大学を諦めたんと違うのか。だから、工業高校へ行ったんやろ。今

さら何を言う」
「でも、うちの高校からでも大学へ行くやつは大勢出てきた。一度は諦めたけれど、行きたくなった」
「うちの息子の誰も大学へは行っていない。それなのに、妹の息子を大学へやるお金を出すなんて言ったらうちの人は青筋たてて怒るわ、うちの長男は大学へ行きたがった。でも、農家の跡継ぎをさせるのに大学はいらん、と言って、うちの人は、頑として認めなかった。弟や妹は勉強が嫌いだったので、大学へ行きたいとは言わなかった。ただ、弟は分家をさせるつもりなので、田畑や果樹園を借金してまでたくさん買っている。うちには今、借金はあっても金はない。おかあに言っておけ。息子を大学へ行かしたかったら、自分が働いて入れてやれと。それにお前も家庭の事情はわかっているはずや。もう働ける歳や。おかあが働けなかったらお前が働け。それが筋やろ。高校へ行くとき、お前に散々言っておいたはずや。分相応のことを考えと」
俺は、だめだろうと思っていたが、なかなか諦めきれず、ひょっとして伯母の考えが変わるかも知れないと思ったのだ。やはり甘かった。
伯母の言葉を聞き、大学をきっぱり諦めようと思い、出身高校のあった今いる市が役所の職員を募集していたのを知って、市の職員に応募し、採用された。化学工場に応募しなかったのは、工場勤めは自分には合わないと思ったし、普通科出身者の連中と採用試験で勝負したかったのだ。
村を出、この町へ来て、市役所勤めをしながら通信教育で大学卒の資格をとった。だが、役所の中では大卒とは認められないだろうと、届けなかった。高卒のままだ。
それを思い出したとき、ふっと、この女を税金免除者にしてやってもいいなあ、と思った。もう少し待って、それでも払わなかったら免除者にしてやろうと思って退散した。
だが、考えが変わった。今は是非とも税金を払わしてやる。マイナス3なんてとんでもない。前回は、この女性を免除者にしてやっても成績はいくらでもカバーできる、と思っていた。しかし、今日は違うぞ。それは甘い。点数が低いのは俺はやはり俺の能力のなさを示していると思うようになった。ただ、取り立ての難しさを逃げるために免除者にしているだけではないかとも。俺は今まで良心的にやってきたつもりだったが、甘さがあった。税が何よりも重要な国民の義務であることを忘れていた。先日も免除者にした「移動のラーメン屋」だが、車を持っていたが、三年間住民税を納めず、固定資産税も、介護保険料も滞納していた。「儲からない。食べていくのが精いっぱい。息子も高校へやるのがやっと。女房が病気で働けないので、払いたくても払えない」と言って嘆くので、免除者にしてやった。そのとき、いろいろ調べたのだが、彼の収入は申告した通りかどうかが疑わしかった。材料の仕入れ高と売上高との比率が違いすぎる。あれでよかったのか。いけない。俺はまだ甘い。
俺は前に立っている女性を必死ににらみつける。
「税金を払わなかったら延滞金と言って、払うお金が増えますよ。家賃なら、払えなかっても、滞納金が増えることはないでしょう。税金は払わなければ滞納加算金が追加されますから。だから、家賃より税金を払う方が得ですよ」
「ここの大家は家賃払わない者はすぐに出て行けって怒鳴りにくる。そりゃ恐ろしい男や。差し押さえやと言って、この間、払うまで預かっておくと言ってうちのテレビを持っ

て行きよった。テレビを見るのが唯一の楽しみやったのに」
「そんなの法律違反ですよ。そう言って取り返しなさい」
「吾もそう言ったんやが、家賃払わんのも法律違反やと言うて持って行きやがった。ほんまに腹が立つ。今度金が入ったら家賃は払うつもりや」
俺は家の中を見回す。金目のものがないか。差し押さえされて困るもの。おお、冷蔵庫が新しい。それに駐車場に原付バイクが置いてあった。番号から所有者も確かめてある。
「税金はいつ払ってくれるんですか。もしこの三ヶ月以内に払われなかったら、差し押さえに来ます。あの冷蔵庫も、それから大家のところにあるテレビも、駐車場に置いてある原付バイクも、あれはあなたの物でしょう。あれも差し押さえます。それに生命保険が一つ入っていますよね。あれも」
「ええ。そんな殺生な。冷蔵庫は、買い物に行っている暇がないので、一度にたくさん買って保存しておくのに必要やし、ミニ・バイクは仕事場へ行くのにいるし、生命保険は、吾がもしものことがあっても、息子が大学を辞めなくてもすむように掛けてる」
「だから、払って下さいよ。税金は何よりも一番に払ってもらわないと、そうでないと差し押さえにきます。悪質な滞納者ということで」
「悪質な滞納者やなんて。もう少し待ってくれたら絶対払うがな。夫の借金、払い終わるまで。その後、払うから」
「いつ終わるんですか」
「あと三回」
「今年中に終わりますか」
「ああ、ビル清掃会社に頼んで便所洗いのビルをもう一件増やしてもらうわ。それに、夜も居酒屋で全日働くことにするわ。そうしたらなんとかなる」
「絶対ですね。もし、今年中に払い込まれなかったら、差し押さえしますよ」
「払うと言っているがな。この薄情者」
「頼みます。絶対ですよ。差し押さえするというのは脅しではないですよ。お知らせです」
俺は、お辞儀をして、また、鉄の階段を下りた。「差し押さえをする、と言っただけでは弱い。具体的にあれもこれもと指摘することだ」と先輩に教えてもらった。そのためには、差し押さえが決まらない前にこの地区にある銀行と郵便局、それに、保険会社に調べに行くことにしている。それは、政府公認だ。役所はそこまで知っているのかと思わせることが必要だ。生命保険がある。あれが効いたかもしれない。
だが、後味が悪い。彼女は昼も、夜も働く、と言っていた。身体はそう丈夫そうでない。顔色も生気を感じさせなかった。彼女の身体が大丈夫だろうか。
こんなことを考えるのは、俺の決心にどこか甘さがあるためだろうか。どうも気分が重い。頭の中に鉛が入っているような感じだ。

前の家と同じような文化住宅に着いた。腕時計を見ると、二十分かかっていた。俺は階段を早足で登り、真ん中辺りの部屋のベルを押す。市の税徴収係から来ました、と大声で告げる。扉が開かれ、化粧のしていないくすんだ顔が現れる。狭い玄関には子どもの靴が散らかっている。

「なに、市役所の徴収係、お礼に菓子折でも持ってきたの。そうじゃない。違うって。未払いを催促しに来たって、ほんまに、この人、顔を見ただけで役立たずの顔してるわ。こんな人を食べさすために、あたしら税金を払っていると思うとほんまに腹が立つ。そやからすぐに金を払う気にはならないのや」
「役立たずの顔」という言葉には、忍耐力があると思っていた俺も殴りたいような腹立ちが起こった。ようし、もし払い込んでいなかったら、払い込みの意思なし、法的処置を望む、と記すことにする。躊躇なしだ。
「まだ、二年間の住民税、介護保険料、払い込んでいただいておりませんので、ぜひ払い込んでいただきたいと思いまして」
「何か、このごろの役所、税金を二重どりするんか」
「二重どりって？」
「今朝、〇〇郵便局で払ったわ。確かめもしないで出てきたんか。この役立たず。さっさと帰れ」
「今朝ですか。本当ですか」
「何、寝ぼけたこと言っているの。帰れ、このくそ役人」
　こんなやつに限って、きっと何も払い込んでいないのだ。今朝払い込んだって、確かに、その日の分は、連絡が来てはいなかったので、確かめてはいなかった。だが、二年も放っておいて、しかも、三度の電話での催告にも、すいません、明日払い込みます、なんて言っておいて、そのままや。猫ババができるとでも思っているのか。このくそばばあ。
「本当ですね。本当なら失礼しました。お詫びいたします」
　俺は何度もお辞儀をしてそこを去った。ようし、もし、払っていなければ、今度こそ罵声をあびせかけて、差し押さえをしてやるから。夜は飲み屋で働いている。そこから時給いくらという形で金をもらっている。振込み先の銀行もわかっている。あれを差し押さえる。見ておけと思った。ようし、すぐに携帯電話を掛けて本当に払っているかどうか調べてもらおう。もし、払い込んでいなかったら、引き返してでも、罵声を浴びせかけてやるから。
　携帯電話で、徴収整理係へ電話をした。事務の女姓職員が出てきた。
「すまないが、ぜひ必要なので、〇〇郵便局に行って山本花美さんが今日税金を納めたのかすぐに調べてくれないか。申し訳ない」と告げた。
「早速、調べてみます。ちょっと時間がかかりますが」
　若い女性職員が快く引き受けてくれた。
　彼女の返事が来るまで、とりあえず、次の家へ向かおう。もしも、納めていたら、彼女の家へ引き返すことはないのだから、と思った。
　次の件は三年以上未納で、額も大きい。しかも、家持ちだ。六十歳を過ぎていて、基礎年金をもらい始めている。差し押さえするものはたくさんある。額が大きいところは、三年以上の３にプラス２が加えられることになっている。今月こそ最下位ではなく最高位になってやる。
　地図を見ながら次の家への道を間違わないようにして歩いた。もう少しでその家にたどり着ける所まできたとき、携帯のブザーがなった。細長い携帯を握りしめながら耳に当てた。先ほどの女性職員からだ。

「ああ、先ほどの件ですけれど、振込み先の郵便局へ行って調べたところ、山本花美さん、住民税と介護保険料、確かに今日、一括で振り込んでいました。よかったですね」と告げた。

「そう、ありがとう。やっぱり彼女の言った通りだったんだ。本当にありがとう」

俺は電話を切った。滞納の全額を一括で振り込んだのか。あの野郎、今日、俺が来るとわかっていたので慌てて振り込みやがったのだ。一度、俺を罵倒してやろうと、待っていたのに違いない。振り込まれたのがうれしいことなのに、素直には喜べない。俺の心がねじ曲がっているためか、それとも彼女の「役立たず」の罵倒が応えたのか。それにしても、どうして一括で払うことができたのだろうか？　ひょっとして風俗の仕事でも？　彼女がいつか言っていた。この上、税金を払わなければならないのなら風俗嬢にでもなるしかない、と、……。

こんなことを考えるようでは、まだ、心を入れ替えたことにはならない。先ほど、心を入れ替えたのだと確認したばかりではないか。俺の考えのどこかにまだ不備が残っている。

次の家へ行く道々、心を入れ替えようと思ったときのことを反芻してみた。

それを考え始めたのは「先月の結果発表」で最下位になり、その後、別室に呼び出されて係長に悪態をつかれた日の帰り、駅のトイレへ行ったときだ。

今清掃中という看板が立てかけてあったが、かまうものかと思い中に入った。しゃがみながら大便のトイレを掃除している男をちらっと見た。おやっと思った。彼は横顔しか見えなかったが、見覚えのある顔だった。俺の視線を感じたのか、彼がふっとこちらを見た。おおっ、と思った。「松井ではないか」と声が出てしまった。彼も驚いたように立ち上がり「ああ」と返事をした。彼は微笑んだが、それは苦笑いだ。目がちっとも笑っていない。嫌なやつに会ったといった感じだった。松井とは高校の同級生で、ともに民話クラブに所属していた。それに、一昨年、同窓会で会ったことがある。彼はそのとき、確か大手の電器メーカーの人事部長をしていると言っていた。

「また、どうして」

俺はこれもとっさに言った。その後、しまった、聞いてはならないことを聞いてしまった、とも思った。

「何人もの首を切った罰(ばち)さ。今は不景気だろう。うちの会社もかなりのリストラをしなければならなくなってね。去年、多くの人の首を切った。中には自殺するやつもいてね。誰の首を切るか俺が決めたんだ。そりゃぁ悩んだよ。それでもそれができたのは俺も最後には辞める、そう腹をくくったからだ。そう思わなければ首など切れない。割り当てられた人数の最後は自分にしようと決めていたんだ。会社は君は辞めなくていい。それなりのポストを用意するから残れと言ってくれたし、女房も辞めることには大反対だった。だが、そうはできなかった。退職金は会社はかなりはずんでくれた。それを食い潰すまでにはなんとかなる。人脈もあったし、俺の会社との取引のあるところは雇ってくれるに違いないと高を括っていた。甘かったね。不景気な上に、関係ある中小企業にはかなり無理をさせていたから、恨んでいたところが多かった。どこも雇ってくれなかった。他の企業も、も

う少し歳が若ければと言って断られるし、俺たちはもうそういう歳なんだよ。そのうち、だんだん機嫌が悪くなってきてね、そりゃイライラするよ。自分の感情をコントロールできなくなり、最後には女房に暴力を振るうようになった。女房は逃げるし、娘には大学を諦めさすし、ただ、そんなとき、唯一、ここだけは雇ってくれた。ありがたいと思っている。これも立派な仕事だと思ってやっているよ。だが、君には言っておくが決して今のところを辞めるなよ。どんなことがあっても耐えろよ。俺みたいになるな」

彼の目には涙がにじんでいた。俺は何と言ったらいいのか、言葉に詰まった。ただ、彼の言うように便所掃除の仕事も立派な仕事だと思った。俺はトイレに行くごとに子どもの頃を思い出すのだ。山村と言えども、当時はバキュームカーというのがあって、すでに糞尿の処理は町がやってくれていた。だが、俺の家は山の中腹にあり、バキュームカーが上がってこられなかった。それで、糞尿の処理は自分でやらなければならなかった。それを作っている田畑の肥料にしたのだが、それはたいへんだった。人はこれほど多くの糞尿をたれるものかとそのときよくわかった。今はその処理はすべて市や町や村がやってくれる。皆はそれが当たり前だと思っている。何とありがたいことか。それができるのも町に税金を納めているからで、そのありがたさがわかっていない。松井はそれと関連ある仕事をしている。松井が言うように立派な仕事だ。だが、彼の得る金はそう多くはないだろう。その対価が低すぎる。デスクワークしている連中よりももっと多くの金を払うべきだ。だが、そうはなっていない。松井がそこから脱出しようと思っているのも無理はない。得られる金に対して仕事はきつすぎる。それに彼の能力を発揮する仕事ではない。

だから次のように言うしかなかった。「その仕事も後ほどきっと役立つよ。景気もよくなりかけている。君の能力を認めるところがきっと出てくる。今はなんとか頑張ってくれ」

俺はそう言うと逃げるようにしてそこを去った。

それから、俺は考えたのだ。俺は今の仕事をどう考えて行えばいいのかと。どういうことを原点として仕事をすればいいのかと。

俺も一時の彼のようにすでにイライラしている。ときどき大声を出したくなる。食欲も減った。なんだか辺りがのっぺらぼうに見え出すときもある。それに、昨夜なんか、出口のない地下道に閉じ込められ、怖れおののいている夢を見た。出口を見つけるのだが出口のところがみんなシャッターが下りていた。目を覚ましたとき、暑くもないのに、胸の辺りが汗びっしょりだった。このままじゃやばくないか。

すると松井のことばが蘇った「そう思わなければ首など切れない」

俺はどう思って差し押さえをすればいいのか。どう思えば差し押さえをためらわずにやれるのか。

そう考えたとき、俺は自分の過去をまた思い出した。

俺は、母親一人で育てられた。そこで考えたのだ。親父がいなくて一番くやしかったことは何だったのかと。

食べる物、着る物は貧しかったが、伯母の家が農家だったので、米はもらえたし、村の中で、みんな都会へ出て行って廃屋になっていた家を無償で貸してもらえたし、家のまわりを畑にして、野菜も作れたし、家の庭には枇杷(びわ)の木や桃の木や柿の木があって、それぞれ旬になると、たくさん実をつけ、それらを食べることができた。それに伯母の家は大き

な果樹園を持っていたので、梨やぶどうをしこたま採ってきて食べた。鶏を飼っていて卵を産まし、卵を産まなくなった鶏は、近所の人に殺してもらい、鶏肉を食べた。それに都会で仕事をしていた伯父は妹への仕送りだと言って幾ばくかの金を毎月送ってくれた。新聞配達もしたし、さらに村には大学生がいなかったので、高校に入るとすぐ俺は、小・中学生を集めて土・日に学習塾を始めた。それに高校では国と地方自治体から奨学金を貸してもらい授業料は免除された。だからそれらの金はほぼ全額、母と俺の生活費に当てることができた。だから病気がちな母が働かなくてもなんとか生活ができた。それまでは悔しい思いをしたことはなかった。

悔しい思いをしたのは高校を選ぶときだった。高校へは普通科へ行きたかった。当時はまだ学区制というのがあって、その学区の中で最もレベルが高いと言われている学校へ行きたかった。十分合格できる成績をとっていた。だが、伯母と母は猛烈に反対した。特に伯母はひどかった。「お前は高校を卒業したら働いてもらわねば困る。妹への援助はお前が高校を卒業するまでと、うちの人に頼んで、米や野菜や果物を援助してやっている。普通科は大学まで行ける財力のある家の子が行く学校や。お前も家の事情はよくわかっているやろう」そう言って、俺を説得にかかった。「もし、お前が普通科へ行くのやったらもう援助は打ち切る」とまで言った。

もし父がおったら大学へも行ける。だから普通科に行ける。だが、俺には父はいない。そう思った。そのとき、初めて父の存在を強く意識した。胃の存在は胃が痛くなったときだと言われている。俺はそのとき初めて父の存在を強く意識したのだ。

俺は高校を出たら働かねばならない。当時は不況で就職難だった。普通科ではなかなか就職できない。両親のいない子は働き口はないとまで言われていた。伯母の言うとおりだ。それなら、何かの技術を身につけた方がいい。仕事につける。だから工業高校がいい。応用化学科なんて白衣を着て実習するらしい。格好がいいではないか。

俺は必死で自分にそう言い聞かせた。だが、俺はやはり悔しかった。普通科に行きたかった。俺より成績の悪いやつでも、学区一のレベルの高い普通科に行けるのに、俺はなぜ？それまで感じたことのない悔しさが襲ってきた。

「おばさんの言うことはようわかった」と俺は言った。すると自然に涙が出た。

「よう決心した。普通なら、中学校を出たら働かねばならない境遇や。高校を出るまで援助はしたる。困ったことがあれば何でも言っておいで。お父さんがおったら大学へでもどこへでも行けたやろうに。でも、いないのだからしかたがない。それがお前の運命や。この村ではまだ農家を継ぐ子で高校へは行かしてもらえない子もたくさんいる。高校へ行けるだけでもありがたいと思え」

伯母はそう言いながら涙を手で拭った。

俺は、父の役目は何かと考えるとき、あの時の悔しさを思い出す。今でもそのときの悔しさが蘇る。子どもの願いをかなえてやるのが父の最大の役目だと思えてくる。俺には息子と娘が一人ずついる。

この間、息子が「お父さん、英語科の連中で、大学はアメリカの大学へ行くというやつがいるねん。僕は日本の語学系の大学へ行く。その間に留学できたらいいな。いや、それは無理か。妹もいることだしな」と言った。妹は音楽大学へ行くことを狙っている。それには個人レッスンを受けねばならない。それには金がかかる。それをわかっての言葉だ。

俺はそれを聞いて情けなくなった。何という頼りない父親か。俺はそのとき決心した。俺は自分の子どもの願いをさておいて、他人さまに同情している場合ではない。まず、父は家族の願いをかなえてやることが何よりも優先すべきことだ。税金を滞納するやつなどは犯罪者に近い。そんなやつを免除者には絶対しないぞ。それに、今は、女性でも働き口はある。努力して利用価値の多い技術を身につけていれば、夫がいなくなっても、大学へはやれる。そのような技術は結婚する前につけておけ。離婚して母親一人で子どもを養っている女性だといえども容赦はしない。俺はそう決心したのだ。西川など怖れるにたらずだ。免除者を０にすることなど簡単なことだ。差し押さえさえすればいいことだ。免除者にするのにどれだけの手間がかかると思っているのか。

俺の基盤はそのとき決まった。俺は容赦なく差し押さえで脅し、差し押さえをして、追い詰め、差し押さえを解いてもらうために、一括、納税させる。ようし、俺は以前のお人好しの俺ではないぞ。鬼の俺になって、特別昇給制度で、何度でも特昇を勝ち取り、まずは課長になり、通信制大学でも大卒と認めさせ、部長にまでなってやる。何度も俺はそう言い聞かす。しかし、どこかに、依然、本当にそれでいいのか、という思いが残っている。まあいい、とにかく、今はその考えでやる。

ここは本当に文化住宅が多いなあ。右側にも、さらにその向こうにも文化住宅がつづいている。これから行く家も文化住宅のオーナーの家だ。文化住宅の住民には滞納者が多いが、オーナーが滞納者とは珍しい。絶対、納めさせてやる。

二階建て文化住宅の前に来た。オーナーもこの文化住宅に住んでいる。ただし、少し改造して、二階に行ける階段を部屋のなかに設置し二階建ての住宅として住んでいる。一番右端の住宅だ。

俺がブザーをならすと、静かにドアが開いて、大家が出てきた。髪が後ろだけしかない。しかもそれらも蜘蛛の糸のようによわよわしい。おでこには深い皺がある。顔は瓜顔だ。その顔を前に突き出して俺をにらみつける。

「また、来たか」

「こんにちは、何度でも来ますよ。前回来たときはすぐに払うと言ってくれていたのに、まだ住民税と固定資産税と介護保険料が払い込まれていません。もう三年分もですよ」

「金がないから払えない。見てのとおり、部屋ががら空きでしょう。三室が入っているだけですわ。この頃は家賃を安くしてもバス付きの部屋でないと人は入らんのです。それに二年前の住民税が高すぎます。あれはその一年前の所得税を基にした額でっしゃろ。何しろ、建築会社と契約していて、その社宅として全室を貸していたんですわ。その会社が突然倒産しよって、全員部屋から出ていきよって。でも、一年前の所得に税をかけてきよって。そんなの払えますかいな。家賃が月、四万円の十五室、月六十万円。それで生活してました。息子が二人、東京の大学へ行ってます。合わせ、月、十四、五万送ってやっていました。ところが、全室空き部屋になってしまって、その後、いくら募集をかけても入ってくれません。入らんのですわ。それでもようやく三室だけが入る人がいましたが。それだけです。年金があっても月十二万円。どうしてこれで生活できますか。それでも税を払え、固定資産税を払え、国保を払え、介護保険料を払えって。どうやって払えます」

一気にまくし立てた。その迫力は俺に迫ってくる。文化住宅はすでに時代から取り残されつつある。彼の言い分はよくわかる。しかし、それを認めたらおしまいだ。
「入らないのはあなたの責任でしょう。部屋をリフォームするとか、一室を潰して共同の浴室をつくるとか、朝だけでもまかないをするとか、入ってくれるように工夫しなければ」
「リフォームはしたいけどその金はどこにありますのや」
俺は言葉に詰まる。
「朝食を出してやるぐらいはできるでしょう。なんとか工夫して下さいよ。それに、家賃だけに頼らんと、働いたらどうです。警備員や清掃員など、いろいろあるでしょう。働き口を探したらどうですか」
「それが。腰が痛くて働けませんのや。ちょっと腰を使う動きをすると痛みが生じて、歩けなくなるのですわ。親父が心配して、この住宅を建ててくれたんです。これ一棟あればなんとか食っていけるやろうと言って」
「奥さんもいてはるでしょう。奥さんは働いていないのですか」
「働いています。病院の炊事婦に。だから、息子に仕送りができます。あんた、息子の大学を辞めさせと言いはるんですか。一人は工学部に行っているので、どうしても大学院へ行きたい、そうせんといいところへ就職できんと言ってます。もう一人はまだ一年生で、語学系の大学へ入ったんで、どうしても留学がしたいと言うし」
「そうできるためにも、あなたが頑張らなけりゃ」
彼の身体はますます縮んで見える。俺は弱い者いじめをして愉しんでいるように思えてくる。これではいけない。この調子だと、免除者にしかねない。やはりアパートの差し押さえはやむを得ない。そこまで追い詰めたとき、彼なら何らかの打開策を見つけるはずだ。そう考えよう。
「あんたが無理してでも働くか、入居者を探してこないと。そうでないと、この住宅を差し押さえますよ。二ヶ月経っても払い込まれなかったら、差し押さえは不意にしますから。連絡なしです」
「でも、この家は収入を得るために必要な道具でしょうが。違いますか。収入に必要なものは差し押さえてはいけないと聞いておりますが」
大家はこれが唯一の武器と言わんばかりに、憎しみのこもった調子で言う。あなたは我々を殺す気かと言わんばかりの強い声だ。
「残念ながら、建物は稼ぐ道具とはみなされません。財産です。だから差し押さえはいつでもできます」
「そんな殺生な」
大家の顔が青ざめていく。眼が血走り出す。
「あれ、お客さんですか」
突然、後ろから声が飛んできた。
「いや、あの、……。何か」
大家が驚いたような表情をする。声がかすれる。俺は振り向くと、まだ、三十ぐらいの眼鏡をかけた青年が立っている。
「お客さんなら後で」青年が言う。
「今日は仕事は？」

「うちの会社、今日が創立記念日で休みです。朝、一寸、会社に顔出して、それで帰ってきたんですわ。夜に祝賀会をやるそうです。それには出ます」
「へええ、それで」
「俺、先月から、正社員になりましてん」
「ほう、それはよかったやないか」
「それで、給料も上がりましたし、大家さんにはいろいろお世話になりましたが、社宅が借りられるようになりました。それで、今月いっぱいで、そこへ引っ越そうかと」
「ええっ」
「ええっ」
大家と俺とは同時に声を上げた。
大家の顔が一瞬で死人の顔になり、俺も一瞬、どきりとした。俺のアパートではないのに、これはどういうこと？。　大家の手が震えだした。これは困った。大家の家族が壊れる。しっかりしろ、大家さん。ここが踏ん張りどころや。
「ちょっと、前もって知らせておこうと思って」眼鏡の青年が言う。
俺たちの異様な雰囲気を察知したのか、あっという間に彼が去ってしまった。
大家は黙って何も言わない。
二ヶ月待ちますと言うつもりだったが、四ヶ月待つに変えた。
俺はそう言うと、慌ててそこを去る。
腰が痛いのにこの歳で働けとはむごいことだ。まさか、息子の大学を辞めさせるというようなことはしないだろうな。
俺の口中が乾く。粘っこいつばが出てきてなんだか苦い。
これで、今日の徴収のための訪問はすべて終了。だが、ほっとはしない。鉛の塊がさらに重く頭の中にありつづける。だが、家に帰ることなどできない。もう一つ、重要な仕事が残っている。これが今後の俺の生き方を左右しかねない。

駅に近づいてきた。ビルが多くなり、道幅も広くなって、車や人の行き来も多くなった。また、道の向こうに高架の上を走る長い車両が見えた。
と、不意に消防車のサイレンが聞こえた。それがだんだん近づいてくるように思えた。この音を聞くと、心がざわつく。心地よさを感じる。立ち止まり、サイレンを聞きつづけた。だが、今度は逆に音がどんどん遠ざかっていく。近づいてきたと思ったのは錯覚だった。火事現場は遠いらしい。がっかりする。長らく火事を見たことがない。火事どころか、たき火や、その元になるマッチさえ見たことがない。見るのはガスコンロの青い火だけだ。無性に火が見たい。燃えさかる黄色の炎を見たい。炎と一体となってみたい。炎を見ると俺の中にある不要なものがみんな燃えてなくなるような気がするのだ。
そう思ったとき、村の小学生の頃に田の脇のかなり大きな小屋の燃えさかるのを見たことがある。火事といえばすぐにその光景が思い浮かんでくる。
俺と同じクラスに、といってもクラスは一つしかなかったが、吉也（きちや）というとてつもない秀才がいた。テストはたいていが満点だった。だが、いつも憂鬱そうな顔をしていた。身

体も細かった。みんなは彼を敬遠した。「あいつは自分たちとは違うんだ」という気がしてならなかった。近寄れば自分の馬鹿さ加減が暴露されそうで怖ろしかったのだ。

その彼があるとき彼の田圃の脇に立っていた農機具や作物を置いておく小屋に火をつけた。彼の家の田圃はかなり家から離れていたが、俺の部屋の窓からはるか真下に見えた。だから消防のサイレンを聞く前に辺りを柿色に染めている炎に気付いたのだ。

俺は慌てて外に出て、小道の坂を走り下り、刈り取られた田圃の畦を伝って、まっ暗な天に向かって勢いよく燃えさかる小屋へ突進した。だが、小屋から十五メートルほどのところで立ち止まった。それ以上近づくのが怖かった。吉也は炎から一メートルほどしか離れていない所で、兵士のような姿勢で立っていた。ただ、彼は白い野球帽、白い上下のトレーニングウェアを着ていて、それが炎の明るさを反射させ、柿色っぽくなり、吉也自身も燃えているようにさえ思えた。

彼は身動きもしなかった。じっと炎を凝視していた。俺は身震いをした。炎が彼の中にずんずん入り込んで行くように思った。

大人たちが田んぼの脇まで走ってきて、火事を見ていた。消防団の人たちが、長いホースの先から、小屋に水をかけ始めた。それでも吉也は全く動かずその場にいて炎がだんだん力をなくしていくのを見ていた。

彼の母親が駆け寄り、彼を抱きかかえながら、そこから離そうとしたが、彼は何か大声を張り上げながら杭のように動かなかった。親に代わって駐在所の警官が彼の手を思いっきり引っ張り、引きずるようにして、道まで連れて行った。その後のことは俺にはわからない。小屋が大きな火の粉をまき散らし、小さくなり、やがて炭火の塊となって、炎が消えた。さらにはそれにも水が掛けられ、小屋は跡形もなく闇の中へ溶けていった。人々の顔も闇の中に消え、声だけが聞こえてきた。

家に帰ったがその夜は何度も目が覚めた。夢の中で「小屋」は燃えていた。決して消えなかった。俺の中にもまた「小屋の火」が入ったようにさえ思えた。吉也もそれを心の中に入れるために燃やしたのに違いない。

親たちは「やっぱり、頭のいい子はどこかおかしくなるんやな。うちの子は平凡でよかったわ」と言い合った。「あの子は、いっぺん火をつけてみたかったからと警察で言っているらしい」と噂し合った。「母親が、医者にするんやといって、家で必死に勉強をさせていたから、頭がおかしくなったんや」と俺たちは言い合った。彼の父親は外国へ出張しているらしい。父親は、医者になりたかったのだが、それができなかったので、子どもをそれにしたいらしい。それで、妻に吉也の勉強を頼んで出かけたと大人たちは言い合った。

吉也は勉強が嫌だったわけではないと思う。好きな勉強をしたかったのかも、あるいは、親に自分の人生が支配されるのがたまらなかったのか。それとも、俺たちと一緒に遊びたかったのか。彼はそれを乗り越えようとして小屋に火をつけた。それが彼の行える唯一の方法だったのだ。そのためにいろいろな方法があっただろうと他人は言うかもしれないが、俺たち子どもにはその方法が唯一だったとわかっていた。

これは後で知ったことだが、縄文時代の人々は家の主人が死ぬと「家送り」と言って家を燃やしたという。あの世に家を送り届けるという意味らしいが、火で家を燃やすのはそこをまっさらな土地にするためでもある。吉也はそんなことは知らなかっただろうが、今までの自分を新しくしたかったのに違いない。

俺の前に思い浮かぶ、ぼうぼうと燃えさかる炎の勢い。中心やその周りは白い。勢いが増していくほど白い部分が増えていく。それをじっと見つめる吉也もまた白ずくめで立っていた。

今日の最後の仕事のために一駅電車に乗らなければならない。駅に向かう。

その仕事は、七時近く、家の主が帰ってくる時刻を見計らって、差し押さえに行くことだ。これは自分の受け持ち区域の差し押さえではない。西川担当の差し押さえだ。しかし、差し押さえの場合、二人で行くことになっている。西川の差し押さえのもう一人に俺が選ばれた。我々の市ではそれを補助者と呼んでいる。誰を補助者にするかは係長が決める。お前もちょっとは西川を見習えということなのだろう。ようし、見習うぞ。西川の後につづくためではない。西川を追い抜くためだ。

地上の電車に乗り、西川の受け持ち地区の区役所に向かった。そこで、西川とその立会人である警官の一人と合流することになっている。

電車は退社時刻でもないのにいやに混んでいた。俺の前に俺と同じような濃紺のスーツを着た会社員らしい男が三人立っていた。中年が二人、若いのが一人だった。彼らは輪のように向かい合っている。俺もよく似たスーツを着ているので、彼らの一員と思われるかもしれない。

「この頃、係長ちょとおかしいです」若い男の声。

「何か彼の係の成績が思わしくないが、そんなそぶりでもあるのか」中年男の声。

「共済組合から金を借りて、家を建て増したそうです。家が狭くなったからだって。でもね、狭くなったって、子どもがいないのだから、奥さんと二人暮らしでしょう。以前の家で十分なのに。それで、どうして狭くなったんですかって聞いてみたんです。何と答えたと思います。いや……。どうして狭くなったと思います」若い男の声。

「本でもたくさん買いすぎて、置き場所がなくなって」中年男の声。

「係長がそんなに本を読むと思いますか。読まない、読まないですよ」若い男の声。

「そうか。だったら、何だろう。普通は子どもが大きくなったからだとか、勉強部屋がないからとか。でも、彼には子どもがいないし」先ほどの男の声。ややダミ声だ。

「わからないなあ。なんで狭くなったんだ」もう一人の中年男の声。

「それがさ、犬のためだと言うんですよ。なんと十匹も犬がいるそうですよ。それもみんなトイ・プードル。二、三匹ならわかりますよ。十匹も、しかも犬のために部屋を建て増しするなんて。犬小屋じゃない、れっきとしたクーラー付きの部屋だそうです。これ、ヘンだと思いませんか、課長」若い男の声。

ダミ声の男は課長なのか。

「へえ、犬の部屋にですか。トイ・プードルの」もう一人の中年男の声。

「確かに、ちょっとおかしいね」課長の声。

「ほんと、それ、おかしいわ」中年の男の声。

「そういえば、確かに、あいつ、この頃、営業成績も悪いらしい。一度、嘱託医に診させるか。部長と相談してみる」課長の声。

俺はそれ以上話を聞きたくなかった。彼らから離れるために奥へ奥へと入っていった。肩と肩が当たった。肩を押して、身体を入れる余白を作り、そこに身体をねじ込んだ。

それが気に入らなかったのか、俺の肩に彼の肩を強く当ててくるやつがいた。痛い、と俺が叫ぶと、周りの人間が俺があたかも危険人物かのような鋭い目で睨んだ。その中の一人が俺に向かって「おい、おっさんよ、次の駅で降りんかい」と今にも絡んできそうな目をした。瞬間、恐怖が襲い、心臓がパクつく。なんということだ。これでは強い納税拒否者に会えばすくんでしまうではないか。だが、男は不満の表情をしただけで横を向いた。俺は深い息をし、さらに慎重に身体をねじ込ませて奥へ行く。

若い女性の首筋が目の前に現れる。そこにそっと唇を当ててみたくなる。しかし、そんなことをすれば、たちどころに腕が掴まれ、次の駅で、痴漢として、降ろされる。たった、一瞬の行為だけで、俺の人格は粉々に砕け散る。

そういえば、今朝の朝の打合会で係長が言っていた。「福祉課」の今西が昨晩、よっぱらって、帰りの電車で、隣に座った女性の膝を触ったって。痴漢でとっ捕まったと言った。痴漢なら、退職だな。ただ、彼は、列車が揺れ、思わず身体の傾きを支えようとしただけで、その腕が、たまたま、彼女の膝に当たっただけと言っているそうだが、もし、それが本当でも、否認をしつづけると、なかなか帰してもらえないから、みんなくれぐれも注意してくれ。特に若い女性の取り立てにはな、と付け加えた。

それを聞いてみんなが笑ったが、人ごとではない。痴漢でとっ捕まっただけで、俺の人生は一巻の終わりだ。女房はわめくだろうし、痴漢を認めでもしたら「停職六ヶ月」で「依願退職」ということになりかねない。公務員は、仕事が安定していると言われているが、一般の企業より、危ういところがある。酒飲み運転でも「退職勧告」されるのだから。中小企業の会社なら、会社に損害を与えない限り、そんなのは大目に見るだろう。公務員だって、以前なら、厳重注意ぐらいで済んだものを。

そう思うと、毎日、無事に役所勤めができているのが奇跡のような気がしてくる。若い女性の傍へいくと、俺の脳が反転するような、奇妙な気がして、狂い始める。危ない。何をするかわからないような気がして怖くなり、女から離れる。

男は敷居を跨げば七人の敵あり、ということわざがあるが、七人どころか無数の敵に取り囲まれている。唯一の味方は家庭ということだが、家庭だっていつ何時敵に回るかもしれない。トイレで会った松井だって、奥さんや子どもが味方でありつづけなかった。盤石な味方なんていない。唯一信頼できるのは自分だけか。いや、その自分だって、自分を裏切る。いや、一番裏切りそうなのは自分かもしれない。

電車が停まり、思いも止まり、俺は慌てて電車を降りた。一駅乗っただけなのにかなり疲れた。

駅を出たところで、深呼吸でもしようかと空を見上げた。空のかなりの部分を分厚い雲が覆っている。波うつ分厚いカーテンのようだ。それが俺に覆い被さる。これでは地下道とあまり変わりがないではないか。

区役所について、案内された会議室に入った。まだ二人は来ていない。時計を見ると約束の時刻までにはまだかなりの時間がある。区の庶務係の女性が温かいお茶を持ってきてくれた。部屋には壁のすぐ横の背の高い机の上に中型テレビが置いてある。お茶を啜りながらテレビの前へ行って、テーブルの横に置いてあるリモコンで、電源を入れた。ちょうどニュースの時間らしい。俺は椅子に戻ってテレビを見た。すでにニュースが始まってい

て、中東の国での戦争の様子や若い力士が勝ち進んでいることなどが放映されている。
話題が変わった。女性のアナウンサーがK県のU市の漁港で軽ワゴン車が海に落ち、家族七人のうち、一人が助かったが、六人が死亡したと報じた。車を運転していたのは六十三歳の〇〇さんで、岸壁にはブレーキの跡がなく、一家心中をはかったものと思われると報じた。
知人が出てきて、〇〇さんは数年前、他県からU市に移住してきてアイスクリーム屋をしていたが、同店では収入が少ないので、たこ焼きを移動販売していたと言った。さらに、奥さんは認知症ぎみで、長男はうつ病で引きこもりになっていたとも言い、さらに、住民税、国保、介護保険、その他に車のローンなど、数百万円近くを滞納していると嘆いていたと語った。所有していた四台の車のうち、二台が差し押さえられた、しかも、残された二台は、たこ焼きをできる代物ではなく、これでは営業がつづけられないと憔悴しきっていたとも告げた。
俺はぎくりとした。業務用の車は差し押さえをしてはいけないことになっているのに、どうして？　俺は数ヶ月前、移動のラーメン屋を納税不可能と判断し、滞納金免除者にした。よかった。彼を自殺に追い込まなくてと思った。
アナウンサーがさらにつづけて、市の税務課の話では、残りの二台の車で仕事はできるものと判断して、他の二台を差し押さえた、と報じた。
我々の仕事は人の生死にも関わる仕事なのだと改めて思い知らされた。しかし、このようなことがあるからと言って、俺の決意は変わらないぞと言い聞かす。こんなこともあるが、逆のこともある。以前、シングルマザーで自宅に住んでいた女性がいた。自宅なので固定資産税を払わねばならない。うつ病で仕事にも出られない。自宅があるので、生活保護もでない。家は売りに出してもぼろ屋で買い手がつかない。そんなことで、市税、固定資産税は免除にした。ところが先日、彼女はブランドの洋服を着て子どもの手を引き、歩いているのを見た。その横には男がいて、にこやかに談笑しながら歩いていた。俺はやられたなと思った。偽装離婚をしていたのか、それとも税金逃れで、籍の入っていない夫がいたのか。あるいはあれはパトロンか。不倫までは我々は調査できない。
俺は再び決意を確かめた。差し押さえはやる。しかも厳しく。できれば西川以上に。金がなく、滞納金を払うため息子が進学できない、休学や退学をしなければならないなどの理由には今後いっさい同情はしない。だって俺はそれに堪えた。それが運命だと諦めた。子どもも家族の運命を引き受けなければならない。だが、それなら、俺の子どももそれを引き受けねばならないはずだ。矛盾するのではないか。いや、矛盾しない。俺はそんな運命を息子や娘に与えたくない。そのようなふがいない父親でありたくはないのだ。たこ焼き屋の親父はふがいない。一家心中だなんて、なんと情けない親父ではないか。だが、そう考えても気分は晴れない。今日は差し押さえには行きたくはない。だが、そんなことでは西川には勝てない。大いに西川から学んでやる。もっと頑張れ、自分。
「やあ、ご苦労」
ドアを開けて西川が入ってきた。髪は左右にきちっと分けられ、市の制服に、〇〇市納税徴収員の職員証を首からぶら下げている。その下はパリッとした紺のズボンだ。さあ、やるぞといった熱気が感じられる。俺も制服と彼と同じ証書を首に掛けているが、穿いているズボンがよれよれだ。

「今日のやつは高額だから、よろしく頼むよ」と西川は俺ににこやかな笑みを送ってきた。かなり機嫌がいい。これで2点が稼げると思っているのだ。いや、慌てて、一括納金する筈だと踏んでいるに違いない。そうすれば5点は稼げると。

西川はどこからか預金通帳を探し出してきて、それを差し押さえた。「さあ、カードも出して」と言った。

家の主である男が西川に向かって体をぶつけて預金通帳を奪い返そうとする。警官が彼の体を抱きかかえて、動きを止めた。

「それを差し押さえられたら、私たちどうやってこの一ヶ月食べていくのです」

「こちらは警察やマルサではないので、そこまでは調べられないんだが、倒産したってまだ、隠し財産はたんまりあるでしょう。わかっているのです。私の友達は倒産して家を差し押さえられ競売に掛けられたんだが、一段落ついたら、すぐに家を買ったよ。新築のマンションをね。それも即金で。どうしてそんなことができるのって尋ねたら笑って蛇の道は蛇だよと言うじゃないか。笑ってですよ」

「そんなやつはいるかも知れないが、私は違う。家はすでに他人名義で、借家が見つかるまで住まわしてもらっている。まったくすっからかんですよ。そこにあるのはようやく就職先を見つけて働いて得た金ですよ。生活にどうしても必要なものは差し押さえてはいけないことになっているのでしょう。法律にちゃんと明記されているじゃありませんか」

「だってね、倒産してできた借財の返金より税が優先されることも法律に書いてあるんでね。法律を破ったのはあなたの方でしょう。自分が法律を破っておいて、法律がどうのこうのとよく言えますね。どうしようもないのなら消費者金融で借りてくればいいじゃないですか」

西川は三十五万円が入った通帳を差し押さえた。

「これだけでは全く足らないから、車も差し押さえます。タイヤロックをしておきました」

「あれは通勤に是非必要なんです。電車だと、一時間半もかかるんですよ」

「一時間半かければいいじゃないですか。生活に絶対必要というわけではないので差し押さえます。一昨年倒産したのだから、三年前にはかなりの儲けがあったわけでしょう。市民税や固定資産税、介護保険料、国民健康保険料などみんな、前の年の実績を元にして査定します。いわば、去年の税金なんですよ、借財を返す前にどうして次年度の税金のことを考えなかったのですか。借財を先に返して、金がないは通りませんよ。ああ、これも生活にどうしても必要とは言えません」

とパソコンを差し押さえる。俺はそれに用紙を貼り付ける。

「ああっ、これはだめです。生活必需品です。会社との連絡用に必要です」

驚いて声の方を見つめると、家の主が体を丸めて何かを奪われまいとしている。西川は彼の腕を握って彼が胸に隠している物を取り上げようとしている。西川は大学時代柔道部に入っていたと言っていた。かなりいいところまでいったと自慢している。家の主は太刀打ちできないだろう。西川はすぐに主の胸から携帯電話を取り上げた。これも差し押さえ品とします。それを俺に向かって放り投げる。俺はそれを受け取ると、差し押さえの用紙を貼る。

「じゃ今度は二階へ行きます」

西川は俺の方を向いて言うと、先頭になって階段を上がっていく。下から見上げる西川の体は大きく見えた。自信に満ちていて、背からもまだ力が溢れている。まるで柔道で相手の胸倉を掴んでいる選手の背中だ。俺たちも二階に上がる。ドアのある部屋の前に立つ。
「そこは息子の部屋で。息子は今引きこもりで、ですから入らないでください」
主の男は西川の肩を後ろから掴んで引っ張るが、動じずに西川はドアに向かって言う。
「市役所の者だ。ちょっと部屋に入るよ。君には何もしないから。黙って部屋の隅にいてくれていいから」
ドアには鍵はない。取っ手を引くとすぐに開いた。窓にはカーテンが引かれ蛍光灯がついている。窓の横には、小型のゲーム機があった。
「これを差し押さえる」
西川はそれを指さす。その途端、中学生ぐらいの少年がその前に立ちはだかる。
「これは僕のもの。父さんのものじゃない。何をするんや」
「僕のものって、父さんに買ってもらったんだろう。だったら家のものだ。君はただ使わせてもらっているだけだ」
「僕のものだ。僕にとって必要なものだ」
少年は鋭い声で叫ぶ。声が刃物のようでキラリと光る。
「だめですよ、それは」
俺はそう言うと、渡されたゲーム機を少年に返した。少年はそれを胸の内に抱え込んだ。
「他人のものは差し押さえできません」俺が言う。
少年と同じような声だ。不思議だ。俺はそうしようとして返したのではなく、自然とそうしてしまったのだ。無意識に、どうして？　なぜ？
「何を言っとるねん。未成年のものはみんな滞納者である保護者のものだ」
「いいえ、それは譲渡されたものです。市民税は親父さんと奥さんの市民税で、この子は所得はないので市民税も他の税も０です。だったら、この子のものは税の対象外です。この部屋にあるものは全てこの子のもの。差し押さえはできません。差し押さえの紙は貼れません」
「何を言っている。譲渡したものではなく、無料で貸し与えているだけだ。所有権は親にある。そんなこともわからんのか」西川が怒鳴る。
「名義のないものは使っている者のものです」俺は反発する。
「何を言う。お前はただの補助員だろう。つべこべ言う権利はないはず」
「いいえ、徴収職員です。単なる補助員なら、徴収職員でなければならない理由はありません。不当な差し押さえをしないように二名に、しかも立会人には警官まで呼んでいるのでしょう」
「これはかせ」
西川は俺の鞄をひったくろうとする。差し押さえの張り紙が入っているからである。俺は鞄を必死で抱え込む。
警官もこの家の主も驚いたように私たちを見ている。
少年はゲーム機を抱くと下の階へと走り降りていく。机の上には何も残されていない。西川は机の上へ恨みがましい視線を送る。
「最下位の徴収員はこれだから困る。かなわんな。ただ、これはきっちり上司に報告して

おく」
彼は苦笑を繰り返し、それ以上は何も言わず部屋を出た。
上司にか。人事課長にも伝わるな。ひょっとして、これでカウンセリングを受ける羽目になるかも知れない。だが、不安感は生じない。こんなことをしなくても西川に負けない徴収者になってやるぞという思いがした。こんなことをしていては俺たちはただのサラ金取立業者ではないか。俺たちはサラ金取立業者ではないはずだ。では、どこが違うのか、どこが？

ようやく差し押さえを終え、西川と別れ、最寄りの駅で降りて、暗くなっている道を家に向かって歩く。ときどき空を見上げると、いつもより真っ黒だった。いつもは日が暮れても都市の空は薄らと雲が見えるのだ。しかし、今日は違う。黒いペンキでも塗られたような暗さだ。
人の気配がし、その方を見ると、電柱の影から男が一人ぬっと出てきた。あっと声を出す暇もなく、彼が吐きつけた煙草の煙が俺の目を襲った。俺はびくっとして後ずさりをし、少しよろけた。男は何も言わず、吸っていた火がまだ残っている煙草を脇の溝に捨て、歩き去った。あいつも敵だった。敵はどこからか不意に現れる。
最近、ここで女子大生が彼氏に脇腹を刺され、瀕死の重傷を負ったところだ。別れ話が原因らしい。今まで味方とばかり思っていた人間が、突然、敵になる。それに、俺だって、人に憎まれても不思議はない仕事をしている。今のやつがそうだとは言わないが、税を取られるのを喜んでいるやつは誰もいない。だったらそれを取りに来るやつは敵だ。ここ二、三年で十件以上の差し押さえをした。逆恨みするやつがたくさんいるはずだ。いつなんどき刺されても不思議ではない。やつらから言えば、俺たちは皆敵だ。しかし、取る方から言えば、納めないやつはすべて敵になる。ただ、みんな税の恩恵だって受けている。それなのにそれについては何も感謝しない。当たり前だと思っている。不条理なことだ。

しかし、税はすべて有効に使われているとは限らない。他人(ひと)の金だと思うと、慎重には扱わない。無駄金も多く使われる。上のやつら、俺たちの苦労を知っているのか。俺たちも彼らを刺したくなる。
俺は捨てたたばこを見つめるために溝を覗く。水が一滴もなく、乾いている。煙草の先はまだ赤い。近くに燃えるゴミでもあれば、溝から炎が立ち上り、ボヤ騒ぎが起こるかもしれない。俺はポケットの中のちり紙を探し、それを煙草のそばに置こうと考える。ちょっとした炎を見ることができるかも知れない。俺は慌ててズボンのポケットから手を離す。やばい。〇〇市の職員が放火をしようとしていたところを近隣の住民が取り押さえ、駆けつけた警官に逮捕された。そのようなことが思い浮かぶ。
すると、また吉也のことを思い出す。小屋が燃え出す。俺はその中にいる。すでに洋服に火がついている。しかし、逃げ出さない。熱い。俺はその中で燃える。
俺は、再びズボンのポケットに手を入れる。役所を出るとき突っ込むようにして入れた一通の封書を取り出す。朝、庶務係があなた宛に手紙が届いていると言って一つの封書を机の上に置いていったものだ。どうせ税の取り立てに対する苦言が書かれているのだろう。それを燃やす材料にしようか。

街灯の下へ行き、手紙を読む。あれっと思う。

「あなたは私の命の恩人です、あなたが来て、私を病院まで運んでくれなかったら、私は家で死んでいたかも知れません。三日も階段の横に倒れたまま気を失っていたのですから。本当にありがとうございました。息子は一人いたのですが、交通事故に遭い、四十代で亡くなりました。だが、孫が一人いて、その子があなたのことを聞き、その後、アルバイトに精を出し、税金分のお金を送ってくれました。まだ、一部ですが早速払い込みました。いくばくかの金を毎月送ってやると言ってくれています。たいへんご迷惑をおかけし、本当に申しわけありませんでした」とあった。

税の取り立てに行ったとき、ドアの鍵が掛かっておらず、しかも何度呼んでも返事がないので、中を覗くと玄関脇の階段の下で彼女が倒れているのを発見し、驚き慌てて救急車を呼び、病院へ運んだのだ。

彼女は持ち家があり、亭主も長く働いていたので厚生年金も入るので生活保護は受けられない。しかし、息子がお母さんのためにと言って買ってくれた家なので絶対手放したくないと言っていた。税金を払わなかったら家を差し押さえますと言ったら、大声で泣き始め、それだけは止めて下さいとひれ伏して懇願された。彼女は、ときどき住民税や固定資産税を払い込むが、それだけでは完納にはならない。

住民税、固定資産税も、国民健康料も介護保険料も毎年払わなければならない。払わなければどんどん加算されていく。それに滞納金までつけ加わる。だが、彼女にはいくつかの持病があるらしく、医療費がかかり、どうしても税を後回しにするらしい。

救急車に同乗して彼女を病院へ運んだとき、俺はただ驚いて一刻も早く病院へ連れて行かねばと思い、彼女を運んだまでだ。そんなことが納税の契機になるなんて。こんなことがそう度々は起こるものではない。だが、なんだかうれしかった。それは点数が増えるからではない、別のうれしさだ。

やはり西川ふうに非情にやらなければならない。しかし、ああはなりたくはない、そういう思いが湧いてくる。ではどうすればいいのか。非情になろうと決心したのに、もうそれが揺らぎ始めている。西川に学ぶつもりでいたのに。なんだか別の方法がありそうな気がしてならない。別の方法で点数を増やす。そんなことができるはずがないのに、そのような方法がありそうに思うのだ。俺はやっぱり甘すぎる。俺たちは鬼になることを求められている。滞納者のいいなりになってたまるか。俺たちの仕事だって社会になくてはならない仕事なのだ。死刑を言い渡す裁判官のように。ではいったいどういう態度で臨めばいいのか？

今までの考えではまだ納得のいく答えを得ていない。

スーパーの強い光が歩道を越え、車道まで明るくしている。俺は今日は独りなのだ。娘は友達とレストランに寄って食べてくると言っていた。あそこに寄って、俺の夕食と明日の娘との朝食用を用意しよう。

お握り二つと朝食用のパンと娘が好きなイチゴやバナナを籠に入れてレジへ行った。レジがいくつかあって、人が並んでいないところが一カ所あった。そこへ行くと、まだ保育園児のような男の子がそこに立っていて、泣きそうな顔をしながらレジの女店員の顔を見

つめている。
「ママが働いているところから、保育園に寄って、僕を連れて、お家に帰ってきたの。そしたらすぐにお食事の用意をするの。お姉ちゃんも、もうすぐ、学校から帰ってくるけど。部活、しているので暗くなってからしか帰ってこない。それで、ママが僕に用事を言いつけたの。家の近くのここで、ソースを買っておいでって。ソースの瓶をよく見ていたのに、僕は間違えたの。ソースではなくてポン酢を買ったの。僕、まだ漢字が読めない。それで、この字（「酢」）わからない。いつも食卓の上に置いてある瓶だから『ぽんソース』と思ったの。それでママが替えてもらってきなさいと言ったの。替えてください」
背伸びして、あどけない手からポン酢の瓶が店員に渡された。
「では、レシート、持っている？」と若い女店員が尋ねた。
「レシート？」
「これ買ったとき、細長い紙をもらったでしょう」
「……」
「うん、あれを持ってこないと替えられないの」
「細長い紙、ああ、ママも紙、持っているね、って言ってた。でも、僕、持っていなかった。でもママに、持っていると言ったの」
子どもはますます泣きそうな顔になる。
「僕、持ってない、と言うとね、ママがきっと怒るの。ママが怒るの見たくない」
「捨てたの。困ったわね」
「捨てたのかな。わかんない」
「なかったら、替えられないのよ。ここの店長さん、それにはいやに厳しいの」
「替えられないの、僕、ママのお手伝いがしたい」
「そうね、えらいわ。でも、規則を守らないと、お姉さん、店長さんに叱られる」
「店長さんに叱られるの？　かわいそう」
「でしょう。困ったわね。どうしよう」
「替えてください。お願いします」
小さな頭を下げる。
「いいわ、替えてあげる。ソースを持っていらっしゃい。そしたら替えてあげるから」
「替えてくれる。ありがとう。今度は間違わない。これ、持ってきたから。これと同じの探してくる」
幼い少年は、ポケットから、使い切ったソースの瓶を出し、女店員に見せると、レジを通り抜け、走って店内へと消えた。
「お待たせして申し訳ございません」
店員は俺に言った。俺は籠を台に置くと、店員は中の品物に器具を当てて、〇〇円、〇〇円と言いながら新しい籠に入れ替えって行った。合計で〇〇円ですと言った。俺は即座にレジ袋はいりません。袋を持っていますから、と言った。俺はいつも鞄の中に袋を丸めて入れてある。それを出し、金を渡し、釣り銭を受け取ると、品物が入れ直された新しい籠をもって荷つくり台へと向かった。
買った品物を袋に入れながら、あの子ども、うまく替えてもらえるのか気になった。すべての品を入れ終わって振り返った。子どもはまだ帰ってきてはいなかった。

「市田さん」と女店員の大声がした。俺のそばで袋に品物を入れ終わって、帰ろうとしている四十代の女性は声の主を探し始めた。レジ係の女性が再び彼女を見て声をかけた。
呼ばれた女性はまだ誰が声をかけたのかわからないらしい。
「市田さん、今日はもう上がりでしょう」
俺の勘定をしたレジ係の女性がさらに大声を出した。
市田と呼ばれた女性は、ようやく3番のレジからだとわかったようだ。レジの女の方を向く。
「あら、小村さん。どうしたの」レジの女性は小村という名字らしい。
「ちょっと、お願い、お金、貸してくれない。三百六十二円、きっちりよ」
「いいよ。でも、どうしたの。レジ中は、買い物なんかできないでしょう」
「子どもが、レシートをなくしたのに、商品を替えてくれって言うから。子どもの間違ったぽん酢を私が買うことにするわ。見つかったら店長に叱られるけど、黙っておいてよ」
「あっ、そうか。子どもにお金を返すのね」
「そう」
「わかった。三百六十二円。はい」
「ごめんね、これ、あなた、持って帰って、よかったら使って」
「そんなのだめ、これ、明日、持ってきてあげる」
「悪いわ。ごめん」
「いいのよ、いいの、じゃあね」
市田という女性は、素早くポン酢の瓶を彼女の袋に入れると、スーパーの出口から出ていった。
その間、実に手短に、すばやく会話をしたので、時間はほとんどかからなかった。小さな男の子はいつの間にか帰ってきていて、彼女たちの会話を不思議そうに聞いていた。
市田という女性が去ったので、小さな男の子は持ってきた瓶を渡し、さらにもう一つ同じ瓶を渡した。
「これ、同じ？　間違いない？」
「ええ、間違いないわ。では、これ、先ほどのポン酢のお金です。ポン酢をこちらにもらったから、そのお金を返します。これでソースを買ってちょうだい」
小村という女店員はお金を子どもに返した。小さな手がお金を受け取って立っていた。女店員は子どもからソースの瓶を受け取り、バーコードを器械にかざし、二百十五円です、と言った。子どもは貰ったお金をそのまま全部店員に渡した。店員はそのなかから百五十七円を子どもに返した。
「これ、おつりよ。いい？　僕が前に買ったとき、三百六十二円を私に払ったの。でも、今度のソースの値段はポン酢より安いの。二百十五円なの。だからおつりが百五十七円。わかったかな」
「うん、わかった」
小さな男の子はおつりをもらったので、うれしそうに頷いた。わかってはいないけれど、店員さんが優しそうなので、間違いないと思ったのに違いない。
「この紙、おかあさんに必ず渡すのよ」
「ありがとう。店員さん。ぼく、お手伝いができたんだよね」

「ええ、立派に。よかったね。おつり、落としてはだめ。紙といっしょにここに入れて、ボタンをかけてあげる」
レジのカウンターから身体を乗り出して、上着のポケットにお金を入れさせ、ボタンがついていたのでそれをかけてやった。
男の子は瓶をしっかりと握り、急いで入り口を出て行った。
俺は、なんだか気分がよくなった。若いのにうまく知恵を出し、少年を助けてやった。
その親切さに心が打たれた。しばらく男の子が去った戸口の方を見つづけて。
ところがどうしたことか、先ほども思い出した、俺が免除者にしてやったシングルマザーのことが、哀れさを演技し、偽装結婚なのか、パトロンなのかわからない男といっしょに歩いていて、俺を裏切った女のことが。
また、どうして？　今、そんなことを思い出すのか。若い女性の店員の親切な行いに感動している今。
きっと、俺は動揺し始めたのだ。本来の俺は今見た店員の世界へ行きたいと思っている。だが、そんな思いに駆られていたら元に戻ってしまう。だから、無意識が俺の失敗を思い出させたのだ。
いや、ちょっと待て。それなら、あの女店員の行為に感動したのは間違いとでも言うのか。そんなはずがない。もっと正直になれ、俺の心にあの店員のような存在になりたがっている心があるのなら、それを認めたらどうだ。
いや、違う。今は厳しく取り立てたいというのが本心だ。父という存在、生活維持を最優先したいという気持ちがある。俺は小学校の頃、将来何になりたいかと思っていたのか考えたことがある。野球選手でも、社長でも、弁護士でも、お医者さんでもなかった。ただ、体力のなかった俺が、それでもできる仕事をし、ご飯が食べられ、お金を借りに行かなくてもいい、そんな暮らしをしたい。だから、何でもいい。俺が耐えられる仕事をしたいとしきりに思っていた。それが俺の夢だった。そのためには仕事が要求することに忠実にならなければならないとも思っていた。それが俺の本心だ。どちらがいったい本心なのか。いや、どちらも本心だ。どちらかの本心を選ばなければならないのなら、当然後の本心だ。それこそが俺の根底にある本心だ。
そう考えても、俺の心はしっくりしない。俺は、スーパーの玄関で立ち止まる。俺は夜空を見上げる。まだ、微かに光が残っているはずなのに、俺には漆黒の空に見える。と、どこからか、ちょっと待て、あなたは見誤っている、という声がする。いや、したように思う。「見誤っている」ってどういうことだ。
しばらく考え込んだ。ああ、そうか。そういうことか。もしあの子の間違いが俺であったらどうかということだ。あの店員はどう振る舞ったかだ。
あの子にしたような行為をしただろうか、否である。決してあのような行為はしなかった。レシートがなければ取り替えはできません、と言い張ったに違いない。あの優しい心を持った女店員は俺には絶対、スーパーのきまりに従った行動をとったのに違いない。いかに気の毒に思ったとしても、大人には容赦はしなかっただろう。それは相手によりけりなのだ。こんな平凡なことをどうして気づかなかったのか。
そう考えたとき、小学生の頃、俺が大好きだった若い女の先生から暗唱させられた詩が口をついて出た。

「一くわ／どっしんとおろして　ひっくりかえした土の中から／もぞもぞと　いろんな虫けらがでてくる」

畑を耕す手伝いをしている大関松三郎という農家の子の書いた詩だ。その詩の終わりが特に俺の心にしみたところがある。

「おまえらは　虫けらといわれ／おれは　人間といわれ／おれは　百姓といわれ／おれは　くわをもって　土をたがやさねばならん／おれは　おまえたちのうちをこわさねばならん／おれは　おまえたちの　大将でもないし　敵でもないが／おれはおまえたちをけちらかしたり　ころしたりする／おれは　こまった／おれは　くわをたてて考える／だが虫けらよ／やっぱりおれは土をたがやさんばならんでや／おまえらを　けちらかしていかんばならんでや／なあ／虫けらや　虫けらや」

これが人間が生きる世界なのだ。子どものうちはこの世界に入ることを猶予されている。しかし、すでに大人の生きる世界へ脚を一歩踏み入れた途端、感受性の鋭い子はすでに世界の不条理に気づいている。社会という世界はもっともっと不条理に満ちている。

俺は大人だ。夫であり、父である大人なのだ。そうである以上、この不条理な世界を生きなければならない。子どもたちを猶予の世界に留まらせてやるために、不条理の泥をしこたま飲まなければならないのだ。

子どもだったからこそ彼女は親切にしたのだ。認知症ぎみの老女にも同じことをしただろう。それは相手によりけりなのだ。こんな平凡なことをどうして気づかなかったのか。たこ焼き屋の主人は腰の病に悩まされていた。働きたくても働けなかった。すでに大人の世界には生きられない相手に、大人を要求したのだ。徴収官はそれを見誤った。親切な行為は相手によるのだ。相手をよく理解しないと先ほどニュースで見たたこ焼き屋の主人のように一家心中に追いこんでしまう。相手をよく見ないと俺のようにまんまと騙されてしまう。

そういうことなのだ。人を見る能力を養い、大人には絶対税の滞納を許さない。それが俺に与えられた仕事なのだ。税を払う気持ちが十分あるにも関わらず、どうしてもそれのできない事情のある者には優しく。誰にでも厳しく非情になればいいというものではない。怠惰なやつら、誤魔化そうとするやつら、納税しようと必死にならないやつらには厳しい姿勢で臨む。大人の世界にいるやつらには非情になることに躊躇はしない。死に物狂いにならないやつらに、温情など必要がない。

俺は大人という不条理な世界に生きている。その不条理な泥をしこたま飲まなければならない。松井の言うとおりだ。俺は決して今の仕事からは逃げない。必死に食らいついてやる。どんなことをしてでも松井のようにはならない。俺自身の人を見る能力のなさや気弱さをカムフラージュするために同情などをは使わない。それが一番卑怯で安易な方法なのだ。

ようやく、腹は決まった。その姿勢で俺は滞納者と対面する。徴収番付の最下位から脱出してみせる。妻や息子や娘の頼れる父になってみせる。

気分がやや落ち着く。だが、すっきりなどしない。それが大人の気分なのだ。それに耐えつづけるのが夫であり、父であり、大人なのだ。

向かっていく街灯の向こうにも夜空が見える。子どもの頃の山村で見た星一面の空ではない。だが、漆黒の空でもない。薄ら雲の見える夜空である。これもまた美しいではない

か。それに俺は今、早足で歩いてなどいない。帰るときぐらいゆっくりと辺りを見回して歩こう。見慣れた光景なのに、新鮮に見える。おお、今まで廃屋だったああの家が取り壊されている。現在の家送りがなされている。その後にどのような新しいものが建つのだろうか。それを見るのが楽しみである。

了